

えぽく

八重洲古書館
RETRO REVALUE RECYCLE

創刊 4号
2000年6月29日発行
中央区八重洲2-1
八重洲地下街
TEL033272-2888



ニュースタイル

6月5日にオープンいたしました実験店舗です。ファッション店の什器を活用しての展開ですから、ボリューム感にかけるのですが、一見した雰囲気は、古書店とは思えない嬉しいものがあります。焼き物が置かれていたり、グリーンが置かれていたり、絵が掛かっていたり、ワインがあっさりします。これからも、色々なものが仲間入りしてくることでしょ。これからの変身ぶりをお楽しみ下さい。



八重洲古書館店長 渡辺明子
金井書店八重洲店店長 川上亜衣子
スタッフ一同

スタッフのメッセージ

運動が大嫌いな私ですが、腰が悪い私は、腰痛を治すため&ダイエットの為に、少し身体を動かした方がいいのではないかと思い、去年の秋からスポーツジムに通っています。友達もでき、部活動をしている気分(懐かしい!)で、仕事後に通っています。

中でも、はまっているのはボクシング&キックボクシング! 憎い脂肪を落とす為&強くなる為に、ジャブ・ストレート・キック等でストレス発散です。汗をダラダラかきながら、一生懸命ナックルパンチや膝蹴りを練習しています。これも、意外と奥が深く、パンチを出すには、腕の筋肉が、キックをかますには、腹筋が必要になるらしく、私は、一生懸命鍛えました。

...気がつくと、腹筋が割れ、力こぶが出来ていました。更に、困ったことに、動いた後のビールが美味しい!! ついでにご飯も美味しい!! 故に、ダイエットにも縁にもほど遠く、「何かが違う。」と思い出した時には、すっかり男らしくなっていたのです。しかも、最近一度目のギックリ腰にもなり、ジムに通っている意味に疑問を感じている今日この頃。

だけど、ボクシング後、皆で味わうビールの味が忘れられず、今日もせっせと、ジム通いなのです。

八重洲古書館 大久保明子



RETRO = 懐古趣味

REVALUE = 再評価する

RECYCLE = 再利用、環流する

これからも、本をお売り戴くこと、お買い上げ戴くことの両面にわたり、相変わりませずご利用いただきたくお願い申し上げます。

八重洲古書館

RETRO REVALUE RECYCLE

ご意見ご感想ご提案をお待ち申し上げます。
下記宛にお寄せ下さい。

金井書店営業本部

〒161-0032 東京都新宿区中落合42116

FAX 03-3953-7851

E-mail: office@kosho.co.jp

読み終えた本、昔の本をお売り下さい

最新情報はインターネットホームページをご覧ください。
<http://www.kosho.co.jp/>

20世紀懐古館

芥川賞直木賞作家たち

又埋ぐ最も唯めぬる員のうちの一つであり、本の好きな人にとっては最も受賞作が気になる賞のうちの一つである、芥川賞と直木賞。昭和10年から続いているこの二賞の第123回目の受賞作がこの7月に発表されます。今回の20世紀懐古館は、その芥川賞と直木賞にスポットを当て、中でも、本の好きな方が個人的に蒐集された作品を特別にお借りして、これを中心に展示していきたいと思ひます。

この二賞を制定した菊池寛は、目的や選定基準などを、文藝春秋の制定発表号に掲載しています。その後、少しずつ基準に変化があったようですが、それぞれ名を冠された作家にちなんだ作品が選定の基準となっているようです。そこで、まずは芥川龍之介と直木三十五、それぞれについて見てみる事にしましょう。

芥川龍之介は、夏目漱石の最晩年の弟子であり、大正5年に発表した「鼻」を激賞されて、文壇での地位を確立して行きます。古典や説話に材を取った王朝ものや童話などの短編の作品群は、学校の教科書でもお馴染みのもので、誰も一度は読んだ記憶があるのではないのでしょうか。また、巨匠黒澤明により映画化された「羅生門」を御覧になった方も多いことでしょう。晩年は、体調がすぐれず、また精神的にも不安定で、昭和2年、35歳にして、致死量の薬物を仰ぎ、自殺しました。

一方、直木三十五は、流行り廃りの激しい「大衆」文学の作家の宿

命からか、今ではその作品はもとより、名前すら知らない人も多いのではないのでしょうか。もともと、『直木三十一』としてデビューした彼のペンネームの由来は、当時の年齢が31歳であった為と言われていひます。その後、年齢に応じてペンネームの数字も上がって行きますが、作家として認められた作品である「由比根元大殺記」を執筆した歳が35歳であった為、その当時のペンネームである「直木三十五」に落ちつきました。「南国太平記」などの作品を発表しており、広く大衆に受け入れられ、流行作家となりますが、肺結核・脊椎カリエスに侵され、昭和10年に43歳で没しました。



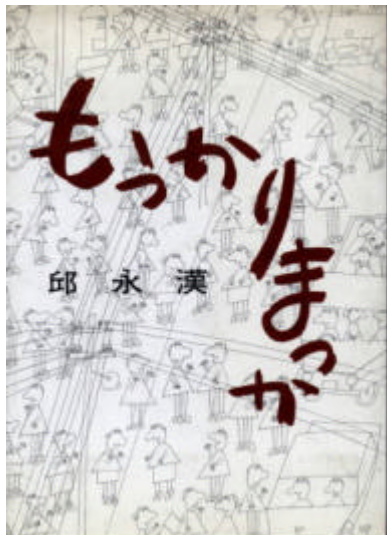
命からか、今ではその作品はもとより、名前すら知らない人も多いのではないのでしょうか。もともと、『直木三十一』としてデビューした彼のペンネームの由来は、当時の年齢が31歳であった為と言われていひます。その後、年齢に応じてペンネームの数字も上がって行きますが、作家として認められた作品である「由比根元大殺記」を執筆した歳が35歳であった為、その当時のペンネームである「直木三十五」に落ちつきました。「南国太平記」などの作品を発表しており、広く大衆に受け入れられ、流行作家となりますが、肺結核・脊椎カリエスに侵され、昭和10年に43歳で没しました。

今回の展示は、最初に述べたとおり、一読者の個人的な蒐集品をお借りし、それを中心にして展開しています。ですから、とても二賞の全てを網羅することはできませんが、特に作品が充実している作家を見てゆくことで、芥川賞・直木賞それぞれを探ってゆければと思ひます。

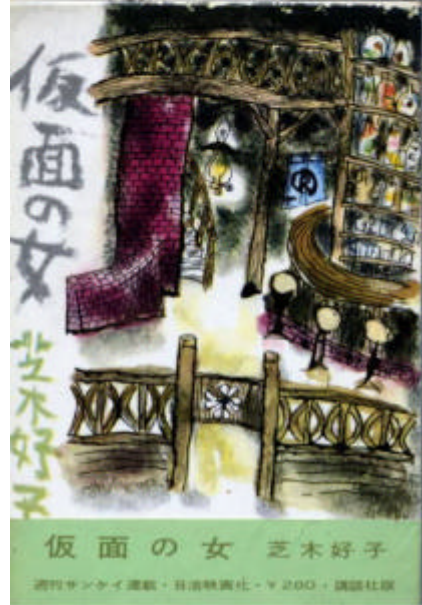
昭和32年上期にあたる、第37回の芥川賞受賞は、菊村到の『硫黄島』でした。この『硫黄島』は、大平洋戦争が背景に織り込まれており、どこことなく重たい感じがしますが、内容そのものは、しっかりとした作品です。作者の菊村到は、本名戸川雄次郎といい、兄は政治評論家の故戸川猪佐武、父は作家の故戸川貞雄です。昭和23年に、早稲田大学文学部英文科を卒業した菊池到は、読売新聞社に入社し、社会部・文化部で活躍をしました。その後、昭和32年に、「不法所持」で文学界新人賞も受賞し、以後は推理小説を中心とした文筆活動に専念しま



展示場所：金井書店八重洲店 & 八重洲古書館
開催期間：2000年7月1日(土) ~ 7月30日(日)



9。菊村到といえは、目能アスヘンスの作家、といふ作家が強い方も多いと思いますが、彼が官能サスペンスを中心に執筆したのは、晩年のことです。没年は平成11年の4月3日、享年73歳でした。ここ数年、偉大な作家の訃報が相次いでおり、残念に思うことしきりですが、菊村到もまた、そのうちの一人として数え上げなければならない作家でしょう。



とつきにくいものではないのかもしれない、という事です。実際に、受賞作家に名を連ねている作家は、受賞作

芥川賞は、新聞・雑誌に発表された純文学の短編作品、というのが選定の対象となっています。今回の展示のための資料にあたって、菊村到が受賞していると知った時には、正直いって、随分驚きました。純文学という定義と、菊村到という作家が、どうしても結びつかなかったのです。そして、長い間、直木賞作家だという錯覚があったせいでもあると思います。が、実際に過去の受賞作や受賞作家を見てみると、石川達三・安部公房・由起しげ子らの、いかにもとうなずける作家達にまじって、五味康祐や松本清張・宇野鴻一郎らの名前もありました。そして思ったことが、芥川賞は、自分で考えている程には、

どはやくとも、面白いと思って読んだ事がある作家も多くありました。“芥川賞”と聞くと“純文学”という定義付けもあり、なんとなく『漱居が高い』『難解』というイメージが先に立って、ゆっくりと時間のある時に、などつい敬遠しがちです。この理川龍之介を校の教科書”て使われる機とで、純文学強・・・という連想が、無意識の内に働いているのかもしれませんが、根本的に“純文学 = 難解”という図式自体が、成り立たないのかもしれませんが。

一方、昭和26年上期、第25回の直木賞受賞は、源氏鶏太の『笑語やさん』他、でした。昭和9年に処女作を上梓した源氏鶏太は、本名田中富雄といひ、富山県出身です。軽妙な語り口の文章と、サラリーマン小説の第一人者、ということ

躍をした作家です。彼が活躍したのは、ちょうど高度経済成長へと向かってゆく時代であり、社会の中でも、また人々の生活のなかでも会社が中心となってゆく、そんな時代を感じさせてくれます。また、第25回の直木賞を受賞する前にも、何度か候補に作品があがっており、実際に受賞したときは、やっと、という感じだったのかもしれませんが。享年は73歳。明治の晩年に生を受けた源氏鶏太は、平成まであと少しという、昭和60年の9月12日に、生涯を終えました。

直木賞の選定基準は、大衆文芸作品の短編・長編で、新聞・雑誌に掲載されたもの、及び単行本として上梓され



由には、芥筆頭に、“学”に教材と社会が多いこ学校 勉

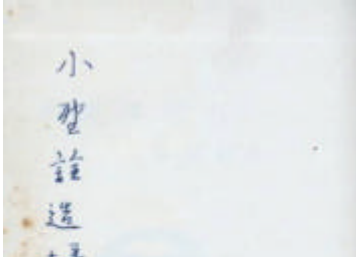


小野詮造堂
源氏鶏太



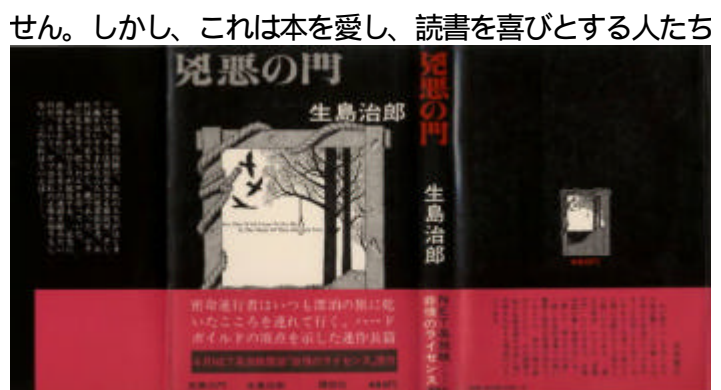
にものとなりま
す。また、源
氏鶏太の例を
見ると分かる
ように、“大衆
文芸作品”とい
うこと

で、まさにその時代を担うような作家の受賞も多くみうけられます。また、受賞作家の幅も広く、エッセイや、ノンフィクションなどの雰囲気のある作品もあります。ただ、やはり大衆文芸の宿命なのか、すでに文学の歴史のなかに埋没してしまって、今では名前も作品もほとんどといっていいほど知られていない作家も、たくさんいます。私自身、江崎誠致や、有馬頼義など、今回の資料をあたって、初めて目にした



黒木直木

作家もたくさん
これは、芥
ことですが、
賞のほう
向が強いよ
す。現在の
出版業界
は、年間数
万冊という
大量の新刊
が出版され
ています。
そのため、
絶版になるものも多
く、どんなに良質の作
品であっても、また一
世を風靡した作家で
あっても、いつの間
にか、消えてゆくことは
珍しいことではありま
せん。しかし、これは本を愛し、読書を喜びとする人たち



にとつては、としも残念なこと
でもあります。

今回の展示品のなかには、単行本はいうに及ばず、文庫としてもすでに絶版となつて久しいものも、たくさんあります。今回(第123回)の両賞の受賞を楽しむとともに、過去の作品と触れあい、新たなる作家や本との出会いが皆様を訪れるなら、古本屋の店員として、また、本の好きな一読者としても、これほど嬉しいことはありません。



20世紀懐古館
芥川賞直木賞作家たち

展示場所：金井書店八重洲店 & 八重洲古書館
開催期間：2000年7月1日(土) ~ 7月30日(日)

